

宮城県産業教育審議会 第1回専門委員会 会議概要

日 時 令和3年9月24日（金）午後2時から午後4時

場 所 宮城県行政庁舎 11階 第二会議室

出席委員 宮原委員，粕川委員，竹田委員，佐藤（洋）委員，阿部委員，佐々木委員，伊藤委員，
都築委員，澤口委員，佐藤（春）委員 以上10名全員出席（敬称略）

県出席者 遠藤高校教育課長，佐藤副参事兼課長補佐，他関係職員（事務局）

1 開 会

2 開会あいさつ

- ・開会にあたり，遠藤課長より挨拶

3 委員の委嘱及び任命

- ・委員に対して課長より委嘱状が交付された。任期は令和3年9月10日から令和4年3月31日
- ・委員及び教育委員会紹介

4 事務局説明（議長：宮原委員）

（1）令和3年度宮城県産業教育審議会専門委員設置目的について

資料1に基づき，事務局より説明

（2）令和3年度宮城県産業教育審議会への諮問の趣旨説明について

資料2に基づき，事務局より説明

（3）宮城県産業教育審議会の審議経過について

資料3に基づき，事務局より説明

[事務局説明について，専門委員からの質問や意見なし]

5 協 議（議長：宮原委員）

（1）専門委員会調査（質問紙調査）について

資料4 質問紙調査実施要項に基づく，調査の実施について事務局より提案

- ・専門委員会として，各校の現状把握，情報収集の手段として，各専門学科・専門高校の取り組みに関する質問紙調査を行うことについて，委員より了承を得る。

資料4 質問紙調査項目（内容）について事務局より提案

[委員からの主な意見]

- ① 工業学科に関して，技術や人づくりは当然必要。しかしながら，これからの人材は，起業（会社を起こす）立場なのか，技術者として働いていくのかという選択も必要と考える。工業の分野においても，起業を含め，商業的な内容も必要と考えるが，工業の学科の先生たちがどのぐらいそのことを必要としているかを計りたい。そのための質問項目を入れていただきたい。
- ② 全学科共通の項目として，義務教育段階での職業教育の在り方を問う設問があってもいいと考える。

- ③ 家政科について、自治体や企業などとの連携は行っているが、家政科は家庭との関係が深いわりに義務教育との連携をしている学校が大変少ないと感じている。義務教育との連携に関する質問項目があるといい。
 - ④ 全学科及び各学科の質問に分かれているが、教える側の意識として、変化の激しい状況の中で、現場で一番大変さを肌で感じている先生方が、今後の社会状況の変化についてどのように考えているかを知りたい。
 - ⑤ 課題研究に対する設問があるが、今後、自発的な取組や創造性を高めるような教育はとても大切になってくると思う。質問として課題研究に対する項目をもう少し深掘りしてもいいのではないか。
 - ⑥ 質問文が少し硬いという印象。現場の先生方は忙しいので、集計方法も含め、回答しやすい手軽さが必要ではないか。
- (事務局) 委員の皆様へ、いただいた意見について承諾が得られれば、事務局でいったん預かり、項目の追加、文言の整理も含め、いただいた意見を反映させ、後日、その内容を委員の皆様へ確認していただいた後、各校へ調査を依頼することを確認。

(2) 専門教科・専門学科の現状と課題について

- ・各委員の専門的な視点から意見をいただく

<委員からの主な意見>

- 専門学科の課題を挙げるときりがないが、少子化の中での定員割れ、充足率が大きな課題。
- それぞれの学科の魅力を、中学生や保護者へ様々な方法で発信、理解に努めること。誰にどのように伝えるのかが重要である。
- 技術・技能を磨いて、会社で働くという視点から、起業・経営に繋げるという発想が必要ではないか。将来の選択肢の1つとして、起業家教育も必要と考える。
- グローバルな時代、様々な国、様々な業種の人とのコミュニケーションが必要である。
- 学科の特色もあり、求人は比較的潤沢で、進路を選択できる状況にあるが、地元企業に人材がうまく供給されていない状況がある。その辺りも考えた進路指導も必要ではないか。
- 検定試験（資格取得）に偏った、重視した考え方が課題である。
- 校内で商品を製造しているが、安易な価格設定で原価計算ができていない。他学科の学びも必要ではないか。
- 複数学科を有している学校だが、学科間の横断的な取組や連携が取れておらず、複数の学校が存在するような状況で、学校としての方向性が定まらない。
- 漁業系の取組みについて、工業にルアーを発注、水産へ提供、試用など学科間の連携を行っている。さらに、つなぎ役を商業が行っている。
- 商業分野はコミュニケーション能力を高めつつ、接着剂的な役割で、農業、水産、工業、その他の産業界を繋げていく役割を担っていくことが、商業の生きる道ではないか。
- アピールの方法として、小中学校はもちろん、幼稚園、保育所も含め、情報提供して、水産に関係する内容を体験、交流を行ってきっていたが、現在のコロナ禍でストップしている状況。
- 水産は第一次産業。船に乗って魚を獲る、海で養殖するなど生産し、加工、流通、販売する。現在、調理師を養成して消費する段階、魚食文化を継承、普及させるところに力を入れている。

- 地区全体の入試倍率が1倍を割っている状況。地域全体として考えていかなければならない。学校間の連携もできるところは行っていく必要がある。
- 教員のなり手、教員確保の問題、年齢構成バランスが悪い。
- 入学した生徒は、幅広い分野の学びや外部との連携、実習により入学して良かったと思ってもらえるが、入学したいと思う段階への魅力の発信の方法が大切だと感じる。
- これまでも取り組んできているが、外部との連携について、発想を変えることが必要だと考える。受け身的に知識や技術を身に付けさせることを重視していて、生徒にとっては学んだ実感が得られると思うが、その学びを誰かに伝える、還元する取組が欠けているように感じる。
- 教員の意識改革、資質能力の向上、人材育成が必要不可欠である。
- 看護学科として県内唯一の公立高校として、現在、定員割れはないが、大学、短大、専門学校に看護学科が増えている中で、生き残りというところ、5年一貫の良さを理解してもらえるかが課題。
- 20歳で看護の免許が得られる利点もあるが、大学で4年間、看護に関する専門性をしっかり学ぶところを2年間で学ぶという欠点として、基礎力、アセスメント力の不足、幼さがあるという病院就職後の評価もある。
- 他の看護学校と一緒にですが、コロナ禍で実習病院の確保の難しさがあり、臨地実習でICTなど駆使しながら、また、オンライン会議システムを活用し、現場の看護師とやり取りするなど校内演習によって、現地を再現することもしているがなかなか難しいと感じる。
- 福祉学科として、県内唯一の公立高校であるが、他に介護福祉士を取得できる学校として、私学の明成高校、迫桜高校（総合学科）がある。これまで4回の国家試験を受験し、全員合格には至らなかったものの、昨年度は92.8%の合格と素晴らしい成果であると考えます。
- 教員の資質能力として、多様な生徒に対する接し方、勉強に向かわせるための指導力と、資格取得を目指していることから、介護福祉の高度な技術、ICTなど様々な専門性を有する教員でないと指導が難しい。
- 開校以来、定員割れをしていることは大きな課題ですが、小中学生、保護者へのPRや理解に努める取組は行っているものの、なかなか難しい。入学してきた生徒の話を見ると、学科の良いところについては、施設設備の充実、専門性の高い先生から指導してもらえるとという意見が多い。未来を見据えた施設設備、教職員の充実に絞っていくのがよいのではないかと。
- 大企業、中小企業、行政と私自身の経験してきた中で、考える力をしっかりと身に付ければ自分の気持ちしだいで、何にでも対応できる。
- 高校生と様々な取組をする中で、高校生は原石であると考えます。磨けば輝く、そのためには学校の外へ出し、様々な人に会わせる必要がある。
- コミュニケーション能力は、どの分野でも必要不可欠。コミュニケーションを身に付けることで、IoT、インターネット、オンライン会議などに活かせる。その際、自分の考えをしっかりと持つこと、自分の意見を言えることが重要である。
- 先生方の話を聞いて、企業側と似たような課題、悩みがあると感じた。学校における定員割れ、先生方の資質向上、専門分野の知識の習得など、企業に置き換えれば、従業員の採用、集客、社員教育など。企業も同じであるが、それぞれの高校、分野での強みや良さをいかに伝えられるかというところが、大きな課題と感じた。また、企業側としても役立てることは

ないかと感じた。

- 自社では、このコロナ禍で新しい事業を立ち上げたが、変えていかないと、世の中の環境の変化に対応できない。無理にでも変えていかないと、これからは生き残っていけない。企業側からすると会社の変化，社会の変化に対応できる人材，一緒にトライ，挑戦していこうとしてくれる人材を求めている。
- 各企業の状況を聞くと，定着率ということに非常に苦労しているという。退職の理由として，ミスマッチが原因と考え，企業側も課題としているミスマッチを防ぐために，学校と企業側が一緒に取り組めないかと考えている。
- 高校の先生方は，短い期間で，生徒を育てていく集中力，思春期でいろいろな思いを抱えた生徒たちを指導しながら，いろいろな学びを身に付けさせ，本当に大変だと思う。
- どうしても，中学校，高校，次は大学，次は就職と，一本道のモデルしか与えられていないところがあるが，自らの体験から，自分の人生の中で，まっすぐコースでなく，学びの部分も含め，行ったり来たりしてもいいと思う。日本以外の外国であれば，いろいろな生き方をしている人がたくさんいる。
- ITやICTなどが，日常的に当たり前に使われる社会の中で，それぞれの分野を考えたときに，高校を卒業して企業に入るというだけではなく，自分たちでビジネスを行う。日本だけではなく世界中，製品を欲しがっている人がいて，販路はインターネットを介して世界と繋がれる。自由に自分たちの学び，技能を使いながら世界の人と繋がり貢献できる，そのようなマインドをどう育てていくか。
- 一方で，日本の国を大切にしながら，地域社会を発展させていくことを考えられるような人材を育てていくことも大切。
- それぞれの分野に教員の研究会があると思うが，広く産業教育の研究会というかたちで，いろいろ横断的に産業教育をどうするか，産業人材をどう育成するかという観点から，研究会，勉強会，意見交換，情報収集を行い，それぞれの学校に戻していくという仕組みがあってもいいと思った。

[その他]

- 粕川委員から，中小企業家同友会求人委員会主催の合同企業説明会の紹介情報提供があった。
- 地域おこし協力隊，地域協働コーディネーターなど，忙しい先生方の間に入る人の活用について話があった。

6 その他

(1) 今後の日程について

7 閉会